

『三四郎』偉大なる暗闇二人

Junko Higasa 2014.4.20

与次郎が「偉大なる暗闇」と称した広田先生のための貸家を探すシーンで、先生が小石を拾って土に何か画を描いている。三四郎曰く『燈台じゃないですか』与次郎曰く『燈台は奇抜だな。じゃ野々宮宗八さんを描いていらしたんですね』『野々宮さんは外国じゃ光ってるが、日本じゃ真暗だから。一誰もまるで知らない。それで僅ばかりの月給を貰って、穴倉へ立籠もって、一実に割に合わない商売だ。野々宮さんの顔を見る度に気の毒になって堪らない』

学校で英語だけしか教えていないのに、哲学で出来上がっている広田先生は漱石。科学実験のために穴倉に閉じこもる野々宮さんは寺田寅彦のようだ。二人の共通点は、欧米に流されない「日本人の」文学と科学を追求した点にある。西洋の表面ばかり追いかける日本社会からすれば暗闇のようなものだ。けれどそれは未来を覗く「偉大なる暗闇」であった。

寅彦は1908(明治41)年10月1日に文部省(当時)から理学博士号を授与され、『三四郎』脱稿2日後の10月5日に、漱石は寅彦を自宅に招き学位を祝っている。『吾輩は猫である』の寒月君は『三四郎』の野々宮さんに発展して漱石の予想通りになった。寅彦の科学を小説に生かした漱石と、漱石の教えを科学に生かした寅彦。この偉大な二人の気が合った理由は、「時代を超えた視点」の一致だろう。21世紀社会では、彼らが語ったことが全て現実に起こっている。